



二の世の元初日は どろ海

農家では毎年春になると、田植えの準備が始まります。苗代で種もみを蒔いて育苗すると同時に、冬を越して固くなった田んぼでは、土を耕して水を入れ、泥をかきまぜて柔らかくします。そして初夏になると、田植えです。本島大教会では毎年6月24日、天理の大裏地区で手植えによる田植えひのきしんを行っています。

裸足になって田んぼの泥中へ足を踏み入れたとき、えも言われぬ心地よさや懐かしさ、そして畏怖を感じるのは私だけでしょうか。「この世の元初りは、どろ海であった。」

明治の初め、大和の片田舎で、親神様が教祖を通して人々に、元初りの真実話を初めてお説き明かし下さいました。

「どろ海」と聞いて人々は、容易に初夏の田んぼの泥を想像したことでしょう。

身近な田んぼにはどじょうも生息していました。日本ではどじょうは食用で、昔から俗に「ウナギ一匹、ドジョウウ一匹」とも言われるほど、高い栄養価を得られる食材とされていました。しかもどじょうは、泥の中で生息しながら体内に泥を溜め込まず、真っ白な身を保っています。

「親神は、どろ海中のどぢよを皆食べて、その心根を味い、これを人間のたねとされた。」

現代の私たちは、頭の中で教理を理解しようとする傾向がありますが、実体験を通して初めて分かることもたくさんあります。

本島大教会布教部(隆)

